ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する

RE:プロジェクト
通信

あついハート

武田こうじ

つばさと
あおぞらが
こすれあう
おとがする

ことばが
ことばを
ふさいでしまう

ゆうぐれに
あふれだす
わたしのなかの
たくさんのあなた

うしろをむいて
だきしめる
ぼんやりと
だけど
あつい
このハート

夏には黄色い花を咲かせていたメマツヨイグサ。冬を前に、種をたたえて大きく伸びていた。

〈仙台市 蒲生字町〉

語る言葉の中にある場所 7

この地域を知るためのメモ

仙台市宮城野区
蒲生字町地区

3・11 その時

鈴木一蔵さんは1960年（昭和35）のチリ地震の時も津波を見ている。その時の津波は陸に上がってくることはなく、すぐに沖合に引いていったそうだ。しかし、「ここまで津波が来るんだ」ということを目の当たりにし、それ以来津波のことは意識していたという。

当日は、自宅に近い中野小学校の屋上へ避難した。なぎ倒された高砂神社の松がぐるぐる回りながら流れてくる様子や、轟音をあげて堤防にぶつかった波が威力そのままにこちらに押し寄せてくる様子を、「もう駄目だ」という諦めと、「みんなもここにいる」という安堵が混ざった複雑な思いで、屋上から見続けた。

多くの仙台市民にとって「蒲生」と聞いて思いうかべるのは、渡り鳥の飛来する干潟と日本一低いといわれた日和山ではないでしょうか。江戸時代、この地に物流の一大拠点があったことを知る人は、少ないかもしれません。

地名の由来ともなったガマの生い茂る湿地を開く最初の大工事が行われたのは、藩祖政宗の時代でした。 慶長年間（1596～1615）に、それまで岩切～大代（現多賀城市）～湊浜（現七ヶ浜）と流れていた七北田川を、岩切で南下させ梅田川と合流して蒲生に注ぐようにしたのです。工事を進めた蒲生村の肝入、小野源蔵はこの功績によって政宗から具足と兜を贈られ、苗字、帯刀を許されたといわれます。

寛文年間（1661～73）には再び七北田川の改修工事が行われ、蒲生から塩竈湾の牛生（ぎゅう）（現塩竈市）までの御舟入堀（おふないりぼり）（貞山堀）と、福室から苦竹までの御舟曳堀（おふなひきぼり）が開かれました。このとき、中継地となる蒲生に、物資を陸揚げするため舟が停泊する舟溜まりと藩の米蔵や塩蔵などが整備され、蔵前には働く人たちが移住して“町”が生まれました。それが今回取材で訪れた「蒲生字町」とよばれるところです。

舟運によって、内陸に位置する仙台城下は塩竈港に直結することになりました。塩竈に集められた藩の扱うすべての物資が蒲生の御蔵にいったん収められたのですから、物流拠点としてのにぎわいは相当なものだったでしょう。一時は、塩竈の活況をしのぐほどだったといいます。

藩の命を受け、2つの堀を開削するという大工事を成し遂げた和田織部は、家中の人々とともに蒲生に移住して新田開発を進め、湿地を美田に変えていきました。

明治時代に入ると蒲生や福室、苦竹などにあった藩の蔵が廃止されて舟運は衰退していきますが、我が国最初の近代港湾工事「野蒜築港」が始まると、明治15年（1882）、東六番丁（現在の仙台駅東口付近）から蒲生まで宮城木道社による木道が敷かれ、御舟入堀や蒲生の舟溜を活かした物資輸送が盛り返します。しかし、明治20年の東北本線の開通によって木道は存在意義を失い、蒲生は物流の拠点としての役割を終えたのでした。

仕事を失った蒲生の人々は、小さな田畑を耕し、小舟で漁をし、商いに精を出し、仙台や塩竈へ出稼ぎに出るようになりました。こうした暮らしぶりは戦前から戦後へと受け継がれ、経済成長の時代に仙台が都市規模を拡大し南蒲生の下水処理場や仙台新港が建設される中で、地区は再び揺さぶられていったのです。

戦後まで残って子どもたちの遊び場になっていたという御蔵は消失し、昭和50年頃まで水をたたえていたという舟溜もその後、埋め立てられました。大津波は、そのかすかな歴史の痕跡も家々も、鳥たちのサンクチュアリだった干潟も日和山も押し流していきました。

大震災から1年9ヶ月。季節がめぐっていく中、ただ干潟と渡り鳥だけはかつての姿を取り戻しつつあるようです。

▲この周辺の海岸のサーフポイントでもある蒲生干潟には、サーファーの姿も戻りつつある。（2012年11月撮影）

【参考文献】
・仙台市史編さん委員会編『仙台市史　通史編3近世1』仙台市、2001年
・寺嶋修二著『高砂の歴史』高砂老人クラブ連合会、1984年
・遠藤信喜、石崎その子、兼平敏子、門脇誠一編『町蒲生』地元学の会、

｜編集後記｜

取材は今年の夏に行いました。猛暑真っ只中の、クーラーや扇風機に頼りながらの取材でした。町蒲生にも夏草の匂いがたちこめていました。写真を見返すと、今年の夏の暑さとともに、あの匂いもよみがえってくるようです。

先日、久しぶりに町蒲生を歩きました。夏草はもちろん枯れて、種をはらんだメマツヨイグサが至るところで寒さに耐えていました。夏にはまた、黄色い花が咲くのでしょうか。その時、そこにある風景はどうなっているのでしょうか。地域の跡がいまだに感じられる場所に立ち、これからの長い復興のことを思いました。（田）

次回は
2013年3月ごろに
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

フリートーク
「想う／考える／おしゃべりする会」vol.3
2013年1月27日（日） 13時30分より
中央市民センター（仙台駅東口）にて開催
＊参加無料
＊詳細はウェブサイトにて

◆ウェブサイト「RE:プロジェクト」制作日誌
http://re-project.sblo.jp/
◆ツイッターアカウント：RE_project

『RE:プロジェクト通信』第7号　2012年12月発行
【主催】仙台市・公益財団法人仙台市市民文化事業団
【編集・発行】公益財団法人仙台市市民文化事業団　事業課事業企画係
〒981-0904　仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5　TEL:022-301-7405／FAX:022-727-1874／info@sendaicf.jp
※この紙はリサイクルできます。

まちの記憶

揺れる思いで、前を見る

西大立目祥子

●物流で栄えた海辺の町

「蒲生っていうのは、本当にいいところでね」町蒲生近くに生まれ育ち87歳になるという鈴木一蔵さんが、感慨深げにそう話し始めた。

鈴木さんが挙げるのは、暮らしぶりの豊かさだ。「ここは田んぼが少なくて農業では利益が得られないから、みんな仙台に稼ぎに出たんだよ。左官屋、大工…そういう仕事で技術を身につけて稼いだのさ。うちもそうだったしね」農家の長男に生まれた鈴木さんは、高等小学校を卒業すると7年も奉公に出され苦労したが、戦後は建設会社を起こし、蒲生に社屋や倉庫を建てて切り盛りしてきた。

「農家は、野菜を貞山堀を行き来してたポンポン船に乗せて塩竈に売りに行ったし、日和山のところに海の家つくって海水浴場やり始めたのは、荒浜より早かった。河口には地引網を掛ける網元があって、お客さんを50人も60人も引き受けて、見ている前で魚をさばいて天ぷら揚げてくれたりしたんだよ。それはおいしいさ、いま捕ってきたばかりだもの」漁を見せ、その場で食べさせるとは、今でいう漁業体験ツーリズムだ。

稼ぎに出るにしても外から人を呼び込むにしても、行動的で才覚あふれる人々が縦横に動きまわって暮らしを立てていたことを、鈴木さんの話は教えてくれる。それは、ここ町蒲生に、江戸時代200年にわたって栄えた物流の拠点があったことと無関係ではないだろう。

江戸時代は御舟入堀が塩竈の牛生から蒲生の舟溜まで続き、蔵の立ち並ぶ御蔵前に形成された町には、魚屋、青物屋、飯屋、茶店、大工や桶屋までがびっしりと並んだに違いない。荷降ろしや荷積みに携わる屈強でいなせな男たちが闊歩し、活気がみなぎっていたはずだ。

明治8年（1875）から調査が開始されたという『陸前国宮城郡地誌』によると蒲生村の人口は約1500人。のちに合併し高砂村となった田子、福室、岡田、中野の各村とくらべると最も多い。“あそこにいけば仕事にありつける”“あそこにいけば面白いことに出会える”ここはそうして集まってきた人たちがつくったまさに“町”であり、その末裔の人々が暮らしてきたのだ。

●働き者の女性たちの親密な付き合い

明治以降、町はさびれたとはいえ、酒屋、醤油屋、衣料品屋、雑貨屋などの店が、地域の暮らしを支えた。「昔はお店に買いに行って、1時間も2時間もおしゃべりしてくるんだっちゃ」と長年、魚屋を営んできた平山みついさんが楽しそうに振り返る。

近所との行き来はひんぱんだった。「今日のご飯、固くてや、おらいのばんつぁん食われねがら、やっこいの茶碗一つけらい、って隣にもらいにいった（笑）」というみついさんの話に、近所だったという小野ミエ子さんが「お客さん来るっていうと、寝間着まで借りに行ったっちゃ」と笑う。水田に農家が点在する農村と違い、狭い区域に家々が立ち並ぶ町蒲生では、隣は家族のような存在だった。この親密な暮らしを基盤に、女たちの多くも仙台へ勤めに出た。

みついさんの家は地引網を掛け、季節になれば金華山沖まで船を出す網元だったが、やがて魚を大釜で煮て骨粉を製造する肥料業に転じ、化学肥料に押されるようになると魚屋を始め、仕出しも行うようになった。50人、60人という大人数の料理を片腕としていっしょにつくってきたのは（↙）

▲鈴木一蔵さん

▲(左から)平山みついさん、小野はるゑさん、小野ミエ子さん

▲かつて貞山堀では蒲生ー塩竈間に定期船が運航され、バスが通る前は重要な交通機関だった。

▲七北田川を背にして町蒲生を眺める。「町」としての賑わいを象徴するかのように、個人商店も多かった。

▲5月には高砂市民センター主催で町蒲生の散策が行われ、多くの市民がかつての姿を懐かしむように歩いた。

近所の小野はるゑさんだ。はるゑさんの料理はそれはおいしかったらしい。結婚式に新築祝いに法事と、仕事は毎日続くこともあった。「夜遅く帰って朝早くから出かけるもんだから、おじいさんに、何、金儲けしてんのや、っていわれたね」と笑うはるゑさん。それでも仕事は楽しかったですか？とたずねると、かたわらのミエ子さんが「それは楽しいっちゃ、会話があるもの」と代わりに答えてくれた。

みついさんは、よく冗談を飛ばしてまわりを笑わせる。笑いは疲れを吹き飛ばし、くぐもった表情をぱっと明るくする。働き者の近所の女性たちを交え、夜遅くまで電灯の灯る厨房は戦場のようであり、にぎやかな教室のようでもあっただろう。臨場感あふれる話に、町蒲生に生きてきたたくましい女の底力を見せつけられた思いがした。

●よかった時代の思い出を胸に

「蒲生は、いいところだったよ」ひとしきり話を聞かせてくれたあと、鈴木さんは、また同じことばを口にした。鈴木さんの脳裏に浮かぶのは、昭和30年代前半までの、活気があって野放図で本音をぶつけながら人が暮らしていた時代だ。「蒲生には、まんぱつ者（血の気が多い者）が多くて、何かというと喧嘩になったが、にぎわっていたんだよ」

だが、汚水処理場ができると海水浴場は消え、仙台新港の建設では水田も砂浜も失われ風景は一変した。土地を安い価格で提供した人もいた。「蒲生の人たちは協力したのさ、でもな…」と鈴木さん。金銭による解決は、50年近くを経ても、多くの人に割り切れない思いを残している。大規模な開発は仙台の中心部から見れば新しい時代の基盤づくりだったろうが、この地域に理不尽を強いるものだった。また同じことが、この大震災の復興で繰り返されないことを願う。

他方、みついさんは、また別の思いであの変化の時代をとらえる。あのころから、近所との親密なつきあいがなくなったよね、と。家に年寄りはいらないというようになったよね、と。地域の暮らしを根本から変えた経済成長の時代がきていたのだ。人々は豊かさを求めて、家業を大きくし、外に仕事を求め懸命に働いてきた。

大津波は、鈴木さんの社屋も、みついさんの店も飲み込み、町蒲生のすべてをさらっていった。地域の盛衰を思う。海に近い寒村が一大流通拠点となり、時代の流れの中で活気を失い、巨大な開発に翻弄され、そして想像を絶する大津波に見舞われた。

鈴木さんは「もう怖いものはない」と話しながら、一方で、「津波に呑まれてしまえば、こんな苦労はしなくてすんだのに」と漏らす。この振幅の中に思いを揺らしながら、被災者のために東奔西走し、会社再建に足がかりをつけようとしている。

たぶん、知恵と才覚で生きてきた町蒲生の人たちに必要なのは、お金でもなくなぐさめでもなく仕事なのだ。働くことがよろこびだったのだから。